Shinpū Books

江戸の良さを見なおす会 Edonoyosawominaosukai

江戸しぐさ講
浦島太郎からのおくりもの

新風舎

故芝三光氏（浦島太郎）お講席にて

「江戸しぐさ講」

（教養講座より抜粋）

日本人は農耕民族という人はいますが、江戸に関するかぎり、これは大まちがいです。士・農・工・商といわれる江戸時代ですが、江戸には「農」がなく、おまけに武士も羽振りが悪く、工と商が幅を利かす当時世界最大の消費都市でした。とりわけ「商人」（あきんど）の財力は武家を圧倒し、歌舞音曲・浮世絵・絡繰物（からくりもの）など数多くの芸術が花開きました。

二世紀半を越す平和は、平成の現在と比較すると、敗戦の一九四五年を江戸開幕の年として、二一世紀どころか二二世紀のはるかに先まで続く計算になります。その間、ただ一度も外国を侵略せず、ただの一回も外国からの侵入を許さず、文字どおり太平を守り通した時代です。

これは世界史にも類例の希な、私たちが誇り得る平和文化の時代といえるでしょう。私は、このようにすばらしい文化を過去に共有した日本ッ子として生まれた仕合せを感じないわけにはいきません。

二〇年ほどまえに「江戸の良さを見なおす会」というサロンを開いたのも、このことを念頭に置き、今日の社会の陰に陽に、なお根強く影響を残し続けている「江戸文化」を見直し、次代に活躍される若い人たちとともに、東京・日本・世界の現況と将来を考え、生

活の向上に役立てたいと考えたのが本音です。

さて、皆さんといっしょにタイムトンネルを通って、二世紀ほどまえの江戸の町衆世界に遊学したつもりで、すべて江戸式にいたしましょう。

まず講座とは「お講」の座です。講はテダテと言い、平たく言えば人間の生き方を考えることです。座はそのために特定の人たちが、トト座・カカ座と同様に「座」をもつことです。一度決めた他人の座を勝手にけがしては（汚す＝占めること）いけませんし、あけても（空ける＝欠席すること）いけません。

全員が出席して講を始めるのが「講座」の本来です。遅刻は弁償不能な他人の待ち時間を奪うことで許されません。刻（とき）を盗むことは金を盗むことよりもむしろ悪とされ「刻盗人（ときぬすっと）」とか「刻泥棒（ときどろぼう）」とかののしられるのもそのためです。

初回だけ出席して後は去ってしまう連中をクラゲと呼び、忘れたころにフラフラ顔を出す者をカトンボと称し、「クラゲムコを取るな、カトンボ嫁を取るな」などと戒めます。また、「隣の料理教室よりもこっちのほうが面白そうだから」などど、いきあたりばったりに飛び込んで来るような人を、「迷い蛾（まよいが）」と呼び「迷い蛾は雇うな」と言います。これはそんな者は電卓を売りに行って、逆にソロバンを売り付けられて帰ってくるような結果になるので責任ある仕事は任せられないということでしょう。

机の並べ方は、明治以降の江戸ッ子たちが「チイチイパッパ式」と評した西欧ふうでは

なく、俗に言う「車座」にします。こうするとお互いの表情も判り、話のやり取りも自由にできるため人間関係が丸くおさまります。

講師は、今日の大学・高校の先生とは意味が違い講の「総帥（そうすい）」で、野球で言えば監督、オーケストラならコンダクター的存在です。受講者を講中と言いますが、講師と講中が一体になって真剣に江戸のお芝居をすると考えてください。メンバーのだれがかけても芝居はできないので、一人は全員を、また全員は一人をいたわる互助・協力の江戸ッ子気質がつちかわれたのです。この気質がよみがえれば「いじめ」はたちどころに雲散霧消するでしょう。

講の会場で見ず知らずの人と出会っても、年令・肩書・学歴などを尋ねず、十年の知己のように新しく話し出すのが「銭湯付合（せんとうづきあい）」です。これは偏見による見誤り（誤解）を防ぎ、江戸をすみやすい「都」にした一因と思われます。その反面、人目ぼれした相手にも本名を告げず、互いに八回の約束をはたしたときに名乗り合う誓いを「八度契（やたびのちぎり）」と言います。この用心深さがあれば何何商事に金をだまし取られるような失敗（ヘマ）はしないでしょう。

さらに、神仏のまえでは人間は平等という考え方で地位・職業・年齢などを問わず、例えば朝のあいさつも上下の別なく「お早うございます」式に世俗を脱して幽玄の世界に遊ぶのが「三脱（さんだつ）の教え」です。

このように江戸しぐさは、振りやポーズというよりも江戸町衆の生活信条や態度と言うほうが適切かもしれません。京都に「田舎の学問よりも京の昼寝」という諺があります。印刷教材による学問も大切ですが、今日国際化のなかで諸外国といかに上手に付き合うかということも忘れてはならない日本人の課題でしょう。明治以降忘れていた江戸町衆の粋な付き合い方や奥ゆかしい江戸しぐさを学習され、トゲトゲしい現代生活を少しでもスマートにすることのお役に立てば幸甚です。

浦島太郎

江戸しぐさ講

浦島太郎からのおくりもの○

目次

「江戸しぐさ講」……5
江戸しぐさ講・公開につきまして…14
江戸しぐさ講座「江戸しぐさ」第1章……20
第2章……30
第3章……43
浦島太郎からのおくりもの
〝江戸しぐさ〟という言葉……52
レビュー〝江戸しぐさ〟①……59
②……63
③……67
④……71
⑤……75
⑥……79
⑦……83

さか昭さんの赤飯……87
象さんは、ウチワか?!……90
言葉遊び……92
聞書……95
たのしい江戸の文まわし……96
実践・江戸しぐさ二〇年目……97
父・自分・子どものこと……102
恩師　浦島太郎の七回忌に思う……104
浦島講師七回忌に寄せて……117
出前講……120
「実践江戸しぐさ講」へのご案内……122

江戸つべれ舞

江戸しぐさ講・公開につきまして

講とは、平易に言えば人間の集合体のことです。江戸の寺子屋では、講とは世の中のことで、漢字では世間と書くと教えていました。

お講は、人と人とが、しっかり手を取り合うところです。しっかり手を取り合うことをお付き合いといいます。そこで、お講は　お付き合いの場ということができます。

そして、この日本一のお江戸に、いつまでも　いつまでも安心して住めるように、お付き合いをしていってください！　と教えたそうです。

江戸しぐさでは、人から聞いた話は「そうです」と書きます。そこで、寺子屋の教えも「教えていました」とは書かないで、「教えていたそうです」とかくわけです。

このように書き記すことで、自分（著者）が実際に見たり調べたりしたことか、他人から聞いて書き残したものかなどの区別を付け安くすることができるわけです。

他人から聞いて書くことを聞き書きといいます。

明治以後、ことに現代では聞き書きというものに価値を認めていませんが、江戸期には聞き書きは　文章の重要な書き方の一つと思われていたそうです。

そこで、この第二歩でも、聞き書きが中心になっています。
これは、死んでいく人たちの体験を少しでも多く、できるだけ詳しく書き記して、あとから生まれる子や孫の世代に役立てようという　いわば　暮らしの知恵といえるでしょう。
さて、講では自分の名前をアダナで呼び合っています。講師もおとぎばなしが好きなので〝浦島太郎〟で通していました。亡芝講師のご活躍は知らない人はないくらい有名でございますが、ことしは七回忌の節目にあたりまして　ご供養の気持ちと感謝の気持ちをこめまして、『江戸しぐさ講　浦島太郎からのおくりもの』を公開させていただきます。
よろしくお願い申しあげます。

「江戸の講には及びもないが、せめて入りたや、藪の講」という川柳？　があるようでございまして、「江戸講中」になるということは、なによりの名誉のことであったようでございます。現代式にいうならば、経済連合のお方々というところでございましょうか？

このように、江戸後期の庶民の中で行われていた「講」を再現して見直そうという主旨のもと、江戸っ子の流れをくむ方に巡り合ってその方のお話をヒントにこの会をつくったという自然発生的にこの講は発足いたしました。フタをあけてみると、なんと、おぞましい現実に直面いたしました。難しくてわからない！　というお声が大半でございました。

立ち読みページはここでおわりです。

お立ち寄りありがとうございました。

またのご利用をお待ちしております。

新風舎
立ち読み横丁